

かねふき明神 みょうじん (広島県)

むかし、あるところに、お金もちの家がありました。むすこがふたりありましたが、父親が早くになくなったので、兄の太郎たろうが家をつぐことになりました。

太郎は、たいへんなけちんぼうで、母親にも弟の次郎じろうにも、ろくにものを食べさせず、いつもつらくあたりました。そこで、次郎は、母親をつれて家を出ました。

次郎と母親は、あるおじいさんの家でせわになって、まずしいながらも、なかよくくらししていました。

あるばんのこと、次郎がねていると、

「次郎や、次郎や」とよぶ声がします。目をさますと、まくらもとに、金色にかがやく神さまが立っていました。神さまは、

「あした、かねふき明神の広場に、なにかいれものをもって来い」といって、きえました。

次郎は、ふしぎなことだと思いながら、もういちどねました。すると、また、

「次郎や、次郎や」と声がして、金色にかがやく神さまが立っていました。神さまは、

「あした、かねふき明神の広場に、いれものをもって来い」といって、きえました。

またうつらうつらしていると、神さまがまくらもとに立って、かねふき明神の広場に  
来いというのです。

あくる朝、次郎は、いれものをさげて、かねふき明神の広場に行ってみました。そこ  
には、いまは明神さまのおやしろはなくなっていて、いちめんの草のなかに、石のこま  
犬がひとつだけ、ぼつりとすわっていました。

次郎がぼんやり立っていると、

「次郎や、次郎や」と、声がありました。あたりを見まわすと、石のこま犬の頭がぐらぐ  
ら動いていました。こま犬は、いいました。

「わしの頭を、金出かねる金出ろというて三回こすれ。金が出るけん。そして、いれものが  
いっぱいになるまえに、もういっぺん頭をこすれ」といいました。

次郎は、こま犬の口の下にいれものをおいて、「金出る金出ろ」ととなえながら、こま  
犬の頭を三回こすりました。すると、こま犬は、大きな口をあけ、オウオウとほえたか  
と思うと、口から、大判小判おおばんこばんをガラガラとはき出しました。あとすこしでいれものがい

っばいになるといふとき、次郎は、こま犬の頭を、もういっぺんこすりました。こま犬は、カチツと口をとじて、大判小判はとまりました。

次郎はよろこんで、大判小判をもってかえり、母親とおじいさんに見せました。そして、そのお金でりっぱな家をたてて、安楽あんらくにくらししました。

太郎は、次郎がいい家をたてたときいて、びっくりして見にいきました。なるほどりっぱな家でした。太郎は、次郎に、

「どうやって、こんな家をたてるほどのお金ができたんじや」とききました。

次郎は、かねふき明神のこま犬から、大判小判をもらったことを話しました。

太郎は、さっそく家にかえって、大きなたるをもって、かねふき明神に行きました。

そして、こま犬の口の下にたるをおいて、「金出る金出る」といって、こま犬の頭をこすりました。すると、大判小判が、滝たきのように、たるのなかにながれこみました。

太郎が、「もっと出え、もっと出え」といっているうちに、とうとうたるはいっぱいになって、さいごのお金が、チャリンとじめんにおちりました。そのとたん、こま犬はウオツとほえて、お金がばったりとまりました。

太郎がびっくりして、こま犬の口のなかをのぞくと、大判が一まい、のどにひっかかっています。太郎は、その大判をとろうと、こま犬の口を手をつっこみました。すると、こま犬は、太郎の手にぐわつとくらいつきました。

手をぬこうとあせればあせるほど、こま犬は、ひどくかみつきます。だれもたすけに來てくれる者はいません。太郎が、なきながら、ふと、たるのなかを見ると、いつのまにやら、大判小判は、かわらや石になっていました。

木の上で、からすが、アホー、アホーと鳴きました。

とーかつちり